

鳥居徳敏著

『ガウディ建築のルーツ』

——造形の源泉からガウディによる多変換後の最終造形まで——

(鹿島出版会・2001年・本体4,300円十税)

神奈川県経営学部 加藤 薫

本書は日本のみならず、国際的に著名なガウディ建築研究家として知られる著者の最新刊である。書評子はかつて同著者の出世作となったスペイン語著作“El mundo enigmatico de Gaudi” (Instituto de España, 1983年)を所見した時、背筋に電流が走ると表現される感激の瞬間を体験したことを憶えている。

その事はさておき、以後、著者は日本の読者向けに鹿島出版会から、ガウディの生涯を扱った「アントニオ・ガウディ」(1985年)、ガウディの建築作品をカタログ的に収録、解説した「ガウディの建築」(1987年)、ガウディの建築理念や思想を論じた「ガウディの七つの主張」(1990年)を刊行し、本書刊行前年にも大著「建築家ガウディーその歴史的世界と作品」(中央公論美術出版、2000年)を出版している。本書は鹿島出版会から出版された前三作と密接に関連し、全体で四部作となる構想の元に書き進められたものだ。

当著作ではガウディ建築の造形的特質とそれらのルーツを七つの章に分けて論じ、ガウディ建築のユニークと評される諸要素の確認点検と、どのような歴史的評価が妥当なものであるかを指摘している。写真図版264点と図表2点を駆使しての解説は微細に渡り、その各論考の当否をここで論ずるほどの知識も能力もない書評子はただ圧倒されるだけである。

日頃から美術作品(本書の場合は建築作

品ということになる)の解説はミステリーものの犯人探しや謎解きプロセスにも似たものがあると思っているのだが、そのプロセスや結論を明らかにしてゆく言説には様々な文体がある。読者は結論に至るまでの枝葉の記述を楽しみ、最後に細部記述と全体の整合性(あるいは非整合性)を確認し、仕掛けの巧妙さに引っかけられた至福の時間に感謝する。TVでおなじみの「刑事コロンボ」シリーズでは、まず犯人が視聴者に明らかにされ、その犯人をコロンボ刑事が独特の捜査方法で割り出し、追いつめてゆく。犯人は始めからわかっているのだが、その犯人に辿りつくコロンボの推理のプロセスに魅せられる。

本書の構成もコロンボ作品に似たようなプロセスを辿る。読者にはまず最初にガウディ建築のルーツ(各章の見出しで定義されている)が明示される。ついで本文では各ルーツの起源からガウディとの出会いまでの歴史を語り、最後にガウディが各造形ルーツをいかに独自の建築言語として蓄積し、変換し、ガウディ流の建築(それはまた年齢を重ねるとともに変化するもの)を確立していったかを明らかにしている。

こう整理するとガウディ建築がいかに「多」くの創作のための原材料から、ガウディ建築という「一」の建築物を産み出したかを語るのが本書の目的だったはずだ。しかし、筆者はこの設定を越えて、ガウディという人間の「創作」と、神の「創造」

の間に横たわる何かを見てしまった。そのとまどいと、次なる課題が本書の「はじめに」に表明されている。

「はじめに」に表明された「『コピー人間』のコンセプトや『創造』と『創作』の思考についての分析がわかりずらく、『後書き』にした方がよかったのではと惜しまれる…』という文章で本評を締めくくるつもりでいたが、それではガウディと著者の長年のつきあいから生じた研究上の葛藤と満足感、あるいは今ある人生の選択への誇りと後悔、職業上の能力や環境の違いからくる嫉妬や羨望感（誰にでも多かれ少なかれあることではないか！）という筆者の人間的な部分が明らかにされない。しかしこの点についての解明や想像はやはり読者にお委せしよう。ガウディは偉大であり、そのガウディに挑戦し、ガウディの彼方に見える人間の「創る」意志と「美」の解明にまで到達しようという著者も尊敬に値する。一般の観光案内的ガウディ紹介書では言及されない、ガウディ研究の頂点と最先端がどこにあるかを確認するために必携の一書である。